慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヘルマン、ハインリヒ、ゴツセンと其学説 : 生誕一百年記念の為めに
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	三田学会
Publication year	1911
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.5, No.1 (1911. 1) ,p.67- 76
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19110115-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

を引用して曰く「一千八百五十四年普魯西には、ラサールを繙くものゝ熟知するが如く、一千五百圓以上の所得を有するものは、一千六百三十三萬三千の人口中僅に四萬四千四百〇七人に過ぎなかつたが、一千八百九十四年から同九十五年に至る年度の間には一千五百圓以上の所得を有するものは三千三百萬の全人口中三十二萬一千二百九十六人と爲り、更に一千八百九十七年より同九十八年に至る年度には三十四萬七千三百二十八人に增加してゐる。卽ち人口の陪加する間に。滿足なる生活を營みつゝある者の數は七倍に增加してゐる。而して一千八百六十六年に併合せられた地方に於ては舊普魯西の本土に比して相當以上の所得を有する者の數多きことを認め、且つ又生活資料の價格は此期間に著しく騰貴したるの事實を參酌するも、尙ほ全人口に對する相當以上の生活を爲しつゝある者の比率は一に對する二の割合を以て增加したることが明かである。更に長期間に就いて觀察すると一千八百七十六年から一千八百九十年に至る十四年間に納稅者總數は二割五厘六毛の增加を爲せるに一千圓乃至一萬圓の所得卽ち安樂なる生涯を送りつゝある市民及び小市民階級は三割一分五厘二毛の割合を以て增加してゐる。所謂資產家階級卽ち三千圓以上の所得を有する者の數は同期間內に五割八分四厘七毛の增加を爲した。此增加の六分の五は三千圓から一萬圓に至る相當の所得を有するものゝ增加に基くものである。這般の比率は獨逸聯邦中最も工業の發達せる索遜に於ても亦同一である。同國では八百圓乃至一千六百圓の所得を有する者の數は一千八百七十九年に六萬二千百四十人なりしものが、一千八百九十年には九萬一千百二十四人に增加し、一千六百圓から四千八百圓に至る所得を有する者の數は同一期間に二萬四千四百十四人から三萬八千八百四十一人に達してゐる」云々と。

普魯西及び索遜兩國の所得稅統計から引用した是等の數字は中流階級漸次に消滅して貧困窮迫の增加を見るに至るは正に資本制度の避く可らざる結果なりと做すマルクスの學說が毫も確實なるものにあらざるの證左として見る可きものである。

斯くてベルンスタインは之を槪括して曰く、「現代に於ける經濟上の發達は單に相對的のみならず絕對的にも亦資產所有者の數を減削するの傾向ありとの主張は徹頭徹尾誤謬である。彼等の數は絕對的にも相對的にも共に增加の勢を示してゐる。若し社會民主政治の運動及び將來の希望が資產所有者數の減退に基礎を有して居るとしたならば、そは正にあらゆる希望を拋棄しなければならぬことと爲るのである」と。彼は「絕えず其數を減じつゝある少數の大資本家に由りてあらゆる剩餘價値を吸收せらるゝに至る」との思想を以て妄信謬見なりと做してゐる。（次號完結）

ヘルマン、ハインリヒ、ゴツセンと其學說

生誕一百年記念の爲めに

小泉信三

主觀的價値學說最初の代表者の一人として、又限界利用說の鼻祖として今日の經濟學者はヘルマン、ハインリヒ、ゴツセンの名を知る。而かも彼の生涯及び其爲人に就ては一般に多く敎へらるゝ所なし。コンラッド「國家學大辭典」エルスター「國民經濟辭典」は屢々古代無名の學者の爲めにも一項を割く事を惜まざるにも關らず、ゴツセンの名は遂に閑却せらる。（「コンラッド」辭典最新第三版は短き小傳を揭ぐ）卽ち彼は正に理論經濟學者の列中に數へらる可くして未だ其事なかりしなり。今や彼れ死して五十年、其書出でゝ六十年、而して彼が生誕の時より正に一百年を經たり、玆に彼の生涯と其著述に就て少しく誌さんとするは全く其機會に非ずと云ふ可らざるなり。

ヘルマン、ハインリヒ、ゴッセンは一八一〇年九月七日、一收稅吏の子として當時佛國主權の下にありし一小都市「デューレン」(Düren) に生る。幼にして數學の才を示せしが父の意に從ひ行政官吏たらんが爲め法律を學び、傍ら伯林及びボンに於てホッフマン及カウフマンに就て經濟學の講義をも聽問す。但し此講義は彼に左までの刺激を與へざりき。一八三四年キヨルンに於て官職 (Regierungorefenerendar) に就きしも行政實務に何等の興味を有せず、尙二年間大學に學ばん事を希望せしが (思ふにゴッセンは學者たらん事を欲せしならん) 父の許可を得る事能はざりき。一八四四年に至り、初めて第二回國家試驗に及第し、先づマグデブルヒの定稅官となり、後エルブルトに移る。其の父の沒するや、一八四七年の末官を棄て、伯林に去り、一八四八年の革命に際しては自由主義に驅られて之に加擔せしが、翌四九年一伯耳義人と共に火災、霰害、家畜保險の一會社を設立せんが爲めキヨルンに移る。然るに此會社は成功を見る事能はざりしを以て、一八五〇年該事業より退き、爾後其母及び二人の姉妹と共にキヨルンに隱住して其著作の完成に從事せり。彼の著書は一八五四年夏ブラウンシユワイヒの Vieweg und Sohn より出づ、(但し序文の日付は五三年一月とあり) 其標題は「人類交通の法則並に是より生ずる人類行動の規則の發展」(Entwicklung der Gesetze des menschlichen Verkehrs, und der daraus fliessenden Regeln für menschliches Handeln) 也。彼は自ら序して此書は二十年潛思熟考の產物なりと云ふ。一八五三年窒扶斯に犯さるゝや强いて病を押したる爲め、遂に肺患を得て病勢漸く進めり。其後彼は音樂理論の構成に力めたるも。此研究は成功を見ずして一八五九年二月十三日終に病に倒れたり。年を享くる事四十有九。

ゴッセンは自ら其著作の價値を信ずる事厚く、其序文中に於て己れを「コペルニクス」に比較しコペルニクスが空間內幾多世界の共在運動に關

し說明し得たる所を彼は地球上の人類共存に就て爲し得たりと自信せり。然るに此著作の世評は甚だ彼の自信と相副はざる者あり、出版の當時に於て何等の反響を喚起する事なかりしのみならず爾後久しく世間の注意より閑却せられたり。(Kautz ; Theorie und Geschichte der Nationalökonomik, 1858. 及び Friedrich Albert Lange ; Arbeiterfrage, 1870. には享樂と困難の理論を述ぶるものとしてゴッセンの著を擧げあり) 然るに一八七〇年代に入るや、價値及び交換に就て從來よりも精到なる研究を試みたる Karl, Menger(Grundsätze der Volksur'rtschaftslehre, Wien 1871) Stanley Jevons (Theory of Pol. Eco,, London. 1871.) Léon Walras(Eléments d'economie politique pure, Lausanne 1874) の三著現はれしが、此中ジエヴオンスとワルラは相互獨立して需要滿足の極限に關する數學的研究を案出したるものにして其發見の前後に就き問題起れり。然るに年代より云ふ時はジエヴオンス先だつ事三年なるを以てワルラは遂に讓步せざるを得ざりしが、四年の後ジエヴオンスはワルラに書を送て彼自らも發見者たるの名は之を一八五四年に出版せられ全く知らるゝ事なくして終り、近時に至て漸く發見されたる一書の著者に讓らざる可らざるを言ひ、一八七九年に現はれたる自著第二版の序に於てジエヴオンスは明かにゴッセンを以て彼の先人なりと稱し、其功業の顧みらるゝ事なくして終りしを嘆じたり。於此ワルラはゴッセン研究を始め、一八八五年 "Journal des Econormistes" に於て「知られざる一經濟學者」と題して其研究の結果を發表し、同じくゴッセンが貢獻の大なるを嘆稱し、此人を閑却するの不當なるを論じたり。

實にゴッセンの頭腦の犀利と思想の明確なるは驚く可き者あり。尤も彼以前に於ても彼と同じき見解を發表したる者ありしは事實なれ共少くも彼は之を知らずして自說を案じたる者の如し。評價の過程 (Bewertungsvorgänge) の說明に數學の方

式を應用し、又價値を純然たる主觀的見地より觀察する事は彼の前に已に試みたる人あり。第一の點に就ては佛蘭西の數學家クルノー、デュピユイを數ふ可く、主觀的價値論に就ては先づゾーデン、ロッツ、トーマスを擧ぐ可し。然れ共ゴッセンが研究の結果は是等學者が研究の結果を拔いて遙に遠き者あり。トーマスの如きも僅かに「……一物の價値の變動に關する法則は之を立定することを能はず……國家經濟學は此の如き法則を要求せず……只一物の價値は幾らか（etwas）なりと考ふるを以て足る可く……此價値變動は欲望（Begehren）の强さに依るに外ならざる事を知るを以て滿足す可ければなり、と云ひ得たるに止る。反之ゴッセンは欲望强度の減少に關する一般的命題を下したるに止らず、更に之より生ずる人類行爲の一般的法則を構成せり。彼はトーマス等と選を異にし深き個人心理的研究を試み經濟學を擴張して一の享樂學（Genusslehre）とし、又一の享樂心理學を構成せんと志し、其思索は理論經濟學上に甚だ重要なる結果を齎らしたるなり。

彼は「人類は其生活を樂まん事を希望し、且つ其生活の目的は生涯の享樂を出來得る限り高むる事に存す」（一頁）との斷定より出發し、此場合には單に瞬間の享樂のみならず全生涯の享樂全量を最大ならしむ可く工風せざる可らずと云ひ、享樂が如何に行はるゝかを考へて直ちに彼の重要なる「同一享樂の大さは絶へず之を繼續する時は遞次減少し、遂に飽實の點に達して止む」との命題に到達せり。後にフエヒナーが更らに擴張して『刺戟漸減法則』と名けたる此法則は玆にゴッセンに依て始めて明瞭に發表されたるなりヴイーザーは之れに命名して「ゴッセン」法則と稱す。次に此法則より彼は更に全ての人類行爲に關する左の命題を引き來る。即ち「多くの享樂併存するも、時間之を許さゞる時は其受くる享樂の量を最大ならしめんが爲め各享樂を其一部に止め其瞬間に於て各部より受くる享樂を均一ならしむるが如くす」

（大意）此は實例に依て說明すれば最も明瞭なる可し。即ち或人が種々の享樂若くは欲望を（A—C）を有し同一の享樂を數次繰返すと假定せよ

A	B	C
5		
4		
3	3	
2	2	2
1	1	1

右場合に於て各享樂の大さは之を繰返す事に依て遞次減少する事第一法則の敎ふる所なり。而して此場合人は只享樂の四單位を享樂する丈けの時間を有する者とせば、其人はAを繰返す事を三回に止む可し、何となればBの第一はのA第四よりも大なれば也。此法則はゴッセン以前に唱へたる人なきに非ずと雖も、之を正確明瞭に道破し、且つ之を經濟學上に應用したる功はゴ氏に歸せざる可らず。之をレキシスと共に「第二ゴッセン法則」と云ふ毫も不可なし。

次にゴッセンは價値の概念を與ふ。「吾人が生活の目的を達するに有益なるが如き外界の狀態を指して、外界は吾人に取り價値を有すと云ふ。」（二四頁）更に此見地より進んで外界の目的物を（イ）享樂資料（ロ）第二級目的物及び（ハ）第三級目的物の三種に分つ。

（ロ）は大體「メンガー」の komplementäre Güter（補足財）に同じく、車の爲めの馬暖爐の爲めの燃料の如き者、又（ハ）は享樂資料の製出に有要なるも決して其自身享樂資料又は其一部たらざる者、即ち原料器具器械等の如し。而して「此種目的物（即ち第三級目的物）の評價は享樂資料製出に有益なる程度に從て間接に行はる」。次でゴ氏は「同一享樂資料の個々の原子は甚だ異れる價値を有し、各人に取りては此原子の一定數即ち一定量のみが價値を有する事を明言せり。（三一頁）「凡て一般に價値を有し得る者の中唯其一定量のみが價値を有す、此點以上の增量は常に無價なり。此無價點は量の增大と共に近づき來るを以て最初の量

は最高の價値を有し、新たに加はる各量は各より少き價値を有し、遂に無價に到達す(三三頁)」此點に於て墺國派の限界利用說はゴッセン(ジエヴオンス、ワルラ)の夫れと形を異にす。卽ち前者に從へば各一定量の價値は最終部分の價値に從て計量す可き者にして、其證明として自由財(例へば河水)に就ては其全量が無價なりとすれ共、之れ純主觀的見地より一歩岐路に踏入れたる者にして、且享樂の際に於ける財の使用を「犧牲」と考ふるに基く者也。

反之「ゴッセン」の如く「享樂の度」を純心理的に觀察せんか、河水と雖其最初の一杯は最大の享樂を與へ、之に次ぐ各杯が漸小なる享樂を與ふる事明白也、之れ限界利用說の主要なる過失の第一にしてゴッセンは能く之を避けたる也。

然れ共此點に於てゴッセンの純心理的研究法も經濟的見地より觀れば一歩邪路に走れるものと云ふことを得可きか。彼以爲らく經濟學を從來所謂有形財と人類との關係を研究するを以て職とし來れるも人の享樂なる見地よりすれば、享樂が物質財より來ると非物質財より來るとは問ふ所に非ず。故に此の如き制限を撤去し「人をして人生享樂の最大量を得せしむ可く助くる」を以て斯學の目的となし、之に對しては Genusslehre (享樂學)なる名稱を與ふ可しと(三四頁)。最も玆にも亦ゴッセンが近時屢々閑却せらるゝ重要なる眞理を道破するを見る。經濟學を以て貨財生產の學なりと考へ經濟問題と技術問題とを混淆するは經濟學不進步の一大原因に非ずや。

併し乍ら「ゴッセン」は享樂の純心理的研究を行ふに當て此等の出發點より事實上の經濟的行動及び過程に渡る可き橋梁を架する事を忘れたり。經濟學は享樂學より出發す可き者にして決して之に止まる可き者に非ず、啻に主觀的評價過程の研究に滿足せずして亦實に客觀的過程をも說明す可き也。而して如何に之等客觀的過程(例へば代價構成)が再び各個人の主觀的評價に歸す可きかの說明は今日尙甚だ不充分なり。ゴッセンは何等の

代價理論を與ふる事なし。故に又其著書の以下の部分は經濟理論に取り左まで有要なりと云ふ事能はず。

今ゴッセンは一般に享樂を得るには努力及び費用を要する事を考ふ可き順序となれり。然るに彼の思想は「困難」(Beschwerde)なる心理的概念と「力作」(勞働)なる生理的概念以上に出でず。然るに之等概念は遙かに正確にして計量し得可き原費(Kosten)なる概念に客觀化する事を得、且つ之に依て經濟理論を單なる享樂學以上に進め、客觀的原費比較を以て主觀的評價に代ふる事を得可きなり。然るにゴッセン此事を爲さず、從て經濟行爲は單に最大の享樂に存せずして出來得る限り最高の「收益」、卽ち出來得る限り最高なる利用の餘剩に存するの理を明言する事能はざりき。卽ちゴッセンの「不快感」を看る甚だ一面的にして單に財獲得の爲めの動作に於ける困難のみを考へ、更に如何なる動作も先づ人に享樂を與へ、之を繰返す事に依て零に歸し、次で困難の遞增を見ると論じ、其概念を不當に錯雜ならしめたり。此點に於てはゴッセンは遙にメンガーの研究に及ばざるが如し。

以上所說の結果をゴッセンは左記の諸法則に於て要言せり。卽ち「生涯の享樂を最大ならしめんが爲めには人は」

(一)彼に可能なる享樂の數及び其絕對的の大さを出來得る限り增加し、

(二)其勞働力及び熟練を出來る限り高め、

(三)充分なる享樂の爲めに必要なる勞働を出來得る限り小にし、及び

(四)是等諸條件の許す程度に從て、合理的に其力を種々の享樂に用ひざる可らず、(卽ち享樂を止めたる瞬間に於ける各享樂の大さを均一ならしむる事)と。

然れ共實際の場合に於ては倫理道德他愛心等の同時に作用するあるを以て全人類行爲に對する指針として是等法則の價値疑はしきは論を俟たず。又右述の諸條件中に相兩立せざる者あり、卽ち「最

多數の享樂を一部宛享受するの必要は勞働力を凡て是等種々の享樂に分つ事を前提とするに、熟練を高め必要なる勞働を可成小にするの必要は人が其行爲力を可成少數の享樂に限る事を要求す」。而して交換の目的は之等兩立し難き要求を同時に滿すにあり。故に又「一定の物は交換に依て(其交換に依て何等の變化を被らざるも)著しく其價値を增加す」と。

次に「全人類に對し享樂の全量を最大ならしめん爲がめには各財を幾何丈け生產す可きや」の問題はゴッセンに從へば「各目的物(財)の各一に歸する最後の原子が其獲得の際に於ける努力と比例して等しき享樂を與ふるが如く生產を組織せば」學理的に解決し得らると云ふ。之れ前揭『ゴッセン第二法則』を應用したる者にして此法則が經濟學と最重要なる所以なり。然れ共右の所論は凡ての人が各其利益を正確に知り、且つ競爭の絕對的自由及び勞力資本の完全なる可動性を前提とす。ゴッセンは此制限を認むる事些か不充分なるの憾あり。

次に轉じて彼の貨幣に對する見解を窺はん。ゴッセンは貨幣從つて代價は「價値の尺度にあらず」(一四九頁)併し乍ら貨幣は「一目的物の製造に要する勞働の尺度なり」と主張す。第一の見解は正しかる可し、(今日の通說は之に反すれ共)第二の見解は之を誤謬なりと敎ふる今日の學說を以て正しとす。ゴッセン曰く、「價値に對し代價は價値と代價の不比例が需要と供給の不均衡を來し、是に由て生ずる財の量と代價との變動が最後に生產せられたる原子の價値と生產の爲めの勞働とが正しき關係を保つに至らしむる限りに於てのみ關係す」と。玆に「正しき關係」と云ふは各財の最後に生產せられたる單位の價値と生產費との比例が凡ての財を通じて等しき事を云ふ。由是觀之ゴッセンは單に代價と價値の關係如何を述べたるのみ、代價は如何にして成立するかに就ては敎ふる所なし。又ゴッセンが貨幣は一物の製作に費したる勞働の尺度なりとの意見を有する者とせば

彼の說は全然正しからず。卽ち此場合には一物の代價は一般に之に投ぜられたる勞働に依て定まる事となる可し。然れ共貨幣額にて表はされたる勞働の對價は決して勞働と同價に非る事享樂財の代價が其物の價値の表章ならざると其理相同じ。一物の賣手は通常其物を評價する事代價よりも低く又買手の評價は之よりも高し。所謂貨幣にて表はされたる交換價値は生 原費と消費者の評價との中間に定まる者にして、ゴッセンの學說は此點に關して缺陷と誤謬とを藏す。遺憾とせざる可らざるなり。

ゴッセンは又貨幣 定量說の信奉者也。(二百一頁)曰く、「凡ての商品の代價は貨幣たる可き目的物の量の變動に比例して變動す」と。(二〇一頁)又更に進んで「貨幣流通の速度は其分量の增加と同一作用をなす」と云へり。彼は金銀を以て最も善く貨幣たるの職分を果す者とし、「紙幣を排除するは緊急の必要なり」と主張す。

ゴッセンは各人は其勞働の果實を取得せざる可らずとの見地より私有財產制を辯護し、且つ「凡て存在する者は其自身其存在繼續の資料を得ざる可らず、然らずんば存在繼續の理由を失ふ」との理由より、財產の利用を成る可く自由にせん事を要求せり。但し土地に對する財產は之を共同團體に移すを可とす。蓋し此場合人は其土地を最適當なる生產に投ずるや否や全く任意なるも、人は此生產の爲めに此最有利なる地位を撰擇する事能はざればなり。最後に彼は信用機關を統一して、一般國家貸出金庫を設くる事を希望し、又終身年金の制を布かん事を提議し終に臨み、此の如くにして「地球には完全なる樂園たるに一の缺くものなきに至る可し」(二七六頁)と斷言せり。

以上は卽ちゴッセン著書の大要なり。著者は其所論を說明立證するに當り幾多數學の方式と記號とを使用したれ共、彼の思想は是等の補助手段に依らざるも充分理解する事を得。今や此著の經濟理論上に於ける價値に就ては疑を挾むの餘地なし。吾人は其一般に引用せられ、一般に讀まるゝ事

の勘きを嘆せざる能はず、余は此書を以てあらゆる經濟學根本概念に關する著作中最も正しき基礎の上に立ち、且つ積極的誤謬を藏する事最少き者なりと斷言す。「ゴッセン」の心理的研究は主觀的利用を等閑視する墺太利派の限界利用說に比べて勝れる者あり。只ゴ氏が其所謂「享樂學」より出發して經濟學本來の理論たる交換交易の研究に移る可き道を發見せざりしは失策と云はざる可らず。然れ共主として交換過程の研究に力を注ぐ今日の經濟學に取りては、先づ嚴格に其心理的基礎を吟味する事最も必要なり。之を怠り、先づ交換の研究を以て始むるは砂上に樓閣を築くに等し。又彼の墺太利派及び亞米利加の理論學者の如きは經濟行爲の心理的前提を取扱ふに當り之を明々白々の公理なりとして輕々に斷じ去れ共、吾人は與せず。經濟理論の研究が今後其批評的消極的態度を改め、方法論に關する問題を棄てゝ經濟現象の積極的解剖觀察を試むるに至る時ゴッセンの著は必ずや其出發の基礎を供す可きなり。此意味に於て「ゴッセンに歸れ」と云ふ、不可あるを見ざるなり。（リーフマンに據る、四十三年十二月稿）

米國憲法と大統領の權能（其一）

小倉和市

北米合衆國の憲法が制定せられて以來其解釋及び指導に付きて恐らく何人よりも最も多く責任ありと認めらるゝアレキサンダー、ハミルトン氏は、合衆國の政治組織は機關各部の權限に關じて充分なる法文上の規定を缺く旨を屢々公言したり。此所說を容認すると同時に機關各部の分界を明らかにし、其運用を圓滑ならしめんが爲め各部の權限爭議を防止し得可き相互抑制の方策は案出せられたり。斯くて各部の專斷を防遏し得可き機關は設けられたりと雖も若し其背後にありて輿論の之を支持するものあるなくんば折角の良法名案も到底權力分割の目的を達すること能はざる可きは公法の研究に從事するものゝ一般に容認する所なり。佛國に於ては思想界の奧底に深く浸染せる諸種の慣習ありて、此慣習は政體の變遷如何に拘らず常に殘留して各時代の憲法に對し、其範圍と性質との點に付きて大なる影響を與へたり。兎に角國民の輿論が憲法の上に與ふる影響の重大なるは過去の經驗に徵するも疑なき所にして、其最も著しき例を擧ぐれば彼の所謂南亞諸共和國の如きは成文法制の上に於ては根本法として合衆國の憲法を採用したりと雖も其政治組織の體樣が合衆國の夫れと雲泥の差異あるは何人と雖も容易に認識する所なり。若し合衆國の政體にして果して從來世人の稱するが如く輿論による政體にして、且つ實際に於ても輿論が過去に於て合衆國の法制を支配したること甚大なりとせば、此制度が繼續する限り輿論も又從前の如く尊重せられざる可からざるは當然なりとす。故に合衆國近代の歷史は同國の現狀が前述せるが如き同國政治組織の根本觀念を粉碎し去るが如き傾向あるを證明しつゝあるものに非ざるや、換言すれば合衆國民は其幸福及び進步に缺く可からざるものと信ずる一定の結果を得んと